

第二期 第百十四号

(初版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

学びあう人々のために

2026. 01. 10 定有堂書店 発行

粗忽長屋

条文解釈と放漫財政

日々是雑言 (ぞうこん) 12

幽霊が消えない理由

生き延びる二〇二六

うきんじょ日記

Talking Quiet, Say Something

本を作る側から (34)

論語について (8)

世界終末戦争は世界を内包する

おこめの話

猫のいないクリスマスなんて

Jeily

編集後記…

奈良 敏行

岩田 直樹

萩原 俊郎

板野 田香

おぎはらきえ

鳥居 貴彦

高木 善祥

村瀬 謙介

小原 修治

古賀 啓三

ムラカミヒロミ

三浦 永理

あきの素生

ドラマメリア

粗忽長屋

奈良 敏行

(定有堂 主人)

十二月六日(土)に「ごぶし館」で伊藤比呂美さんのトーク会があった(二〇二五)。野の花診療所の徳永進医師の会だ。夕方六時から伊藤さんを囲む夕食会があり、お招きにあずかった。

伊藤さんは人の「死」に関心が深く、徳永先生にたたみかけるように質問をあげせかけていた。

わたしはほとんど口を差し挟む余地もなく黙々食べるばかりだった。最後に何か一つくらいは言わないと食い逃げになるかと思いい、体験談を一つ簡潔に語った。新聞の「おくやみ欄」は、習慣的に毎日目を通していたのだが、病を宣告されて後、怖くて見られなくなり、そこだけ隠すようにして紙面をめくるようになった。「どうして？」と伊藤さんに聞かれ、「ひよつとしたら自分の名前が出ているかもしれないから」と答えた。そこに名前が浮き上がるのは確実な出来事だと思えたからだ。しかしこの恐れをうま

く説明することはできなかった。

伊藤さんは、じつと目を見て、それは落語の「粗忽長屋」だと教えてくれた。同じ長屋に住む八五郎と熊五郎という仲良しがいる。ある日八五郎が行き倒れを見て、熊五郎だと思い込む。急いで長屋に戻り、熊五郎に、「大変だ、お前が行き倒れで死んでいる」と告げる。粗忽な二人は死体を引き取りに行く。そういう奇妙な話だ。しかし、なにかあっても不思議はないという気がする。「死」の周辺ではあり得ないことが起こる。

もう一つ、「死」を見て元気が出るという話をした。県立図書館の一階閲覧室によく通うのだが、ある時、足許の一番下の棚に大きな本があるのに目が留まった。『ベトナム戦争の記録』という写真集だった。その中に炎に包まれるベトナム僧の姿があった。路上の十字路でガソリンを全身に浴びた焼身自殺の姿だった。

全身は炎に包まれているが、顔の部分だけはまだはつきりと残っている。両手を胸の前で合せ、顔の表情はおだやかに微笑んでいる。背筋は真っ直ぐに伸びている。この「微笑み」が気になった。図書館に行くたびにその頁を開いてみた。

そうか最後はこのように微笑めばいいのか、と思った。会食での話はそこまでの説明で終わった。

「焼身自殺」という意志の力に圧倒される。「死」の周辺にはありえない物語がたくさんある。最近はそのような類いのノンフィクションを読んでいる。佐々涼子さんの『エンド・オブ・ライフ』などだ。京都の診療所の終末医療を七年にわたり取材する。親しくなった看護師のチーフも死を迎える。そしてやがて著者も最期をとげる。ありえない話がいっぱいだ。

ベトナムの「焼身自殺」の写真に震撼した作家がいた。ちよつとした事故で自分も油をかぶったことがあったらしい。とても「微笑む」どころではなかった。この僧は十五分で後ろ向きに焼け倒れるまで、確実に五分間は微笑んでいた。信じられない話だ。作家は燃えているのは自分だという奇妙な想念に取り憑かれ取材を始める。そして『焼身』という本を残す。

《ベトナム僧が燃えていた。(略)僧は火柱の真ん中で、すつと背すじを伸ばしたまま瞑想の姿勢で坐りつづけている。》

《ふるえがきた。誇りしかった。嘖きあがる炎が、まったく異なる精神のかたちに見えた。》(宮内勝典『焼身』)
「異なる精神のかたち」がここにあった。わたしも、こんな人がいるんだと、背筋が伸びる思いがあった。作家はこの「異なる精神のかたち」に言葉を与えようと現場を訪

れ多くの人に話を聞いた。

作家が、わたしが、ともに得た結論は「焼身供養」という言葉だった。この炎の十字路にはたくさんのひとが詰めかけていた。皆祈っていた。僧は別れに際し、こんなことを告げる。身体が前向きに焼け倒れたら、わたしたちに未来はない。しかし後ろ向きに焼け崩れたら未来はきつと開ける。そして微笑みながら後ろ向きに焼け倒れた。

『焼身』の探求は、入口は「自殺」で出口は「供養」だった。供養には言語的・概念的な支えがある。ベトナムの僧たちは「わが身を焼くことは、大乘仏教においては禁じられていない」という。その供養の概念は「法花経」にあるらしい。この概念を共有し炎をとり囲んで人々は祈るのだ。「死」の周囲にはまことに、粗忽で奇妙な、つまり論理を超えた物語があるものだ。そして物語が未来への希望として紡がれることに驚く。

2025. 12. 12.

ベトナム戦争の記録編集委員会 『ベトナム戦争の記録』 大月書

店 1988

佐々涼子 『エンド・オブ・ライフ』 集英社文庫 2024

宮内勝典 『焼身』 集英社 2005

奈良敏行+三砂慶明

『町の本屋という物語』

作品社 2024



奈良敏行+三砂慶明

『本屋のパンセ』

作品社 2025



これってどうなの？ ―条文解釈と放漫財政

岩田 直樹

〔再解釈本舗・「読む会」講師〕

昨年一〇月から週一ペースで定有堂書店ホームページに福本和夫論を連載している。一八九四年生れの人物の事績であり、一九四五年以前の日本がどのような状況だったかが必要に応じて調べながら書くことになる。

いろいろと参考文献を読んでいる中で、「これってどうなの？」と感じた二つの例を挙げてみたい。

まずは、治安維持法。二〇二五年は施行二〇〇年にあたる。日本史教科書で教わった記憶はあるが、今まで法律の内容や執行状況を調べたことはない。

中澤俊輔『治安維持法―なぜ政党政治は「悪法」を生んだか』(中公新書、二〇一二年)と荻野富士夫『検証 治安維持法―なぜ「法の暴力」が蔓延したのか』(平凡社新書、二〇二四年)を読む。中澤は成立過程を、荻野は運用面に重点を置く。中澤本、荻野本の順に読めば概要は掴める。荻野本が朝鮮、台湾、満洲など「外地」での運用を詳しく記述していることは大きな収穫である。以下の議論は両著作とは無関

係な妄想である。

治安維持法はわずか七条からなる短い法律である(読み易さを考えて引用は片仮名を平仮名に直す)。

第一条には「国体を変革し又は私有財産制度を否認することを目的として結社を組織し又は情を知りて之に加入したる者は一〇年以下の懲役又は禁錮に処す 前項の未遂罪はこれを罰する」、第二条には「前条第一項の目的を以て其の目的たる事項の実行に関し協議を為したる者は七年以下の懲役又は禁錮に処す」とある。一斉検挙(三・一五事件)が行われた一九二八年の治安維持法改正緊急勅令では第一条の最高刑が死刑となった。

国会の議決ではなく勅令によって死刑にしてしまう裏技には驚く。「実行」に移さなくても「協議」しただけで懲役又は禁錮になるのであれば、居酒屋談義で政権批判(結社による協議?)をしようものなら検挙されることになりかねない。実際、俳句会や詩人クラブも弾圧されたという。

最も引つ掛かったのは「そもそも国体とは何か」という根本問題である。明確な概念の定義がなされなければ法律で「国体」という語を使用することはできないはずだ。

文部省は天皇機関説を排撃した国体明徴運動を受けて、一九三七年に副読本『国体の本義』三〇万部を全国の子供関係者に配布した。そこには「大日本帝国は、万世一系天皇

皇祖の神勅を奉じて永遠にこれを統治し給ふ。これ、我が万古不易の国体である。」と書かれている。この表現から「国体」の具体像が想像できるだろうか。

丸山眞男は『日本の思想』（岩波新書、一九六一年）で「国体」を支える大日本帝国憲法の「輔弼」概念を取り上げる。「輔弼」とはつまるところ、統治の唯一の正統的源泉である天皇の意思を推しはかると同時に天皇への助言を通じてその意思に具体的内容を与えることにほかならない。「無限責任のきびしい倫理は、このメカニズムにおいては巨大な無責任への転落の可能性をつねに内包していた。」「無責任の体系」の完成態である「無構造の構造」「國體」は否定的な同質化作用（異端の排除）のみに力を発揮する。

よく引用される箇所である。丸山らしい晦渋な表現だが、要は「国体は何なのかよくわからん」と言っているに過ぎない。

もう少し掘り下げてみよう。第一条には「私有財産制度を否認すること」とある。となると、第一一〇回で取り上げた権藤成卿のように大化の改新（公地公民制の始まり）を理想社会と見做すことは第一条違反となる。権藤といえは、尊皇主義の権化ともいうべき人物だ。

治安維持法の主たる対象はわずか数百人ほどの共産主義者であつた。条文を字義どおりに読むと、共産主義者よ

りはるかに多い熱烈な国粹主義者も特高（特別警察）が検査しなければならなくなる。これってどうなの？

紙幅が尽きそうだ。第二の例は戦時財政である。

小野圭司『太平洋戦争と銀行』なぜ日本は「無謀な戦争」ができたか（講談社現代新書、二〇二五年）は類書がほとんどない分野を扱っている。サブタイトルは「なぜ日本は無謀な戦争」の後始末ができたか」とすべきで、敗戦直後の満洲、台湾、朝鮮、樺太などでの銀行家たちの奮闘を描いている。

本書が扱う興味深い事実は多いが、驚愕したのは戦時財政のいい加減ぶりである。昭和一九年度の戦費は対GNP比九九%だったが、「外地」の現地通貨で支払う抜け道によつて日本政府の支出は対GNP比五三%まで下がったこと。臨時軍事費特別会計（昭和一二年度以降）の合計一一〇〇億円は昭和一九年GNPの一・五倍だったこと。

対GDP比二〇〇%超の借金を抱えているにもかかわらず、プライマリーバランスや財源を全く考慮せずに放漫財政を続ける二〇二六年の平時財政と比べると、どちらが戦時財政なのか頭が混乱してくる。

ひよっとして今は戦時財政？ これってどうなの？？

日々是雜言（ぞうごん） 12

萩原 俊郎

（倉吉市在住者）

日ごろ気になることを、つれづれなるままに。

稀有（けう）な人

高市ネタが続く。自分でも「自家中毒」を起こしそうで今回で止めにしたい（笑）。『トランプにたしなめられる稀有な人』。最近、思わずうなった投稿の川柳である。台湾有事で米軍が「出る」とも言っていないのに、「出る」と言ってしまったあの高市首相の国会答弁。

「存立危機事態」は、①中国が海上封鎖、台湾侵攻に出る②これに対し米軍が軍事介入③中国は日本国内の米軍基地に反撃④「領土の存立が危うい」として自衛隊が出動—というプロセスが前提なのに、高市は「台湾の有事は日本の有事」という安倍の遺した言葉（ただしこの言葉は彼の首相退任後）が頭にすり込まれているのか、米軍が関与する②③を見事にすっ飛ばしてしまった。

トランプはあわてて北京と東京に電話し、高市に「事態の沈静化」を求めた。つまり「米中間の大切な交渉を前に、頭ごなしに勝手に騒ぐな」というわけだ。

似たような事例は続く。「日本も核を持つべき」。官邸筋の高官がもらしたオフレコ発言に、米國務省がただちに反応した。「（被爆国の）日本は核不拡散の世界的なリーダーである」。こんなことを米國に言われるとはね。そして「核抑止力はわれわれの仕事」と釘を刺した。

そろそろ米國も、高市政権が「リスクなもの」に映り始めているかも知れない。日米同盟のためには安定した保守政権を望みたいが、靖国神社に象徴される復古主義的な保守勢力には共和、民主いずれも警戒心がある。

それ以上に米國が「リスク」に感じているのは、むしろ高市政権の経済、ばらまきの「積極財政」だろう。円安でトランプの嫌うドル高が進むだけでない。万一、米國債の最大保有国の日本が財政破綻し、それを売するような事態になったら米國債は急落、米経済は大打撃を受ける。

米國は國益に敏感だ。そのためなら相手が同盟國の首脳だろうが容赦しない。え、そんなことできるかつて？

角栄もはめられた

「ムネオハウス」で失脚間もない鈴木宗男氏を、不謹慎ながら新聞社の講演会で招いたことがある。1時間半では足りず別会場を借りて延々3時間、熱弁をふるった。

一番力が入っていたのが「私は米国にはめられた」という持論。「ロシアとの交流事業、アフリカ諸国への支援。米国に頼らない独自の多極外交をやろうとしたのが気に障ったんでしょなあ」。途端に、政治とカネの問題、外務省や北海道開発に絡んだ収賄疑惑が次々浮上。「疑惑のデパート」と名指しされ、政界を一時追われた。

「はめられたのは田中角栄さんも同じですよ」と彼は付け加えた。中国で兵役体験のある田中元首相は、国交回復では米国に出し抜かれたが、明治大卒の周恩来との信頼は厚く、米国以上の「熱烈友好」を築いた。米国が手を焼く中東産油国との交渉も得意とするところだった。

「ロッキード事件は米上院の公聴会（コーチャン証言）が発端。日本では権力の絶頂だった角栄さんも、完全にはめられた」と鈴木氏。いささか「陰謀論」めくが、世界中で政治指導者の失脚やクーデターを企ててきた米国ならば「むべなからん」と彼の講演に深くうなずいた。

「身を切らない改革」

議員の数が減って、「ああ、これは良くなった」と思える議会があったら、どうか教えて欲しい。

私が初めて取材した頃の倉吉市議会（1989年）の定数は30、それが今は17。半分近く減ったのに今年の選挙は無投票になった。36年間に議員報酬は増えたが、議会に全く「熱」がない。

石破前首相が、自民と維新の議員定数削減法案に「納税者、主権者の代表は少ないほど良いという考え方は間違っていないか」と述べたが、まさに正論だ。それどころか、この削減法案には「隠された意図」がある。

大阪府議会は、私が取材した2000年当時は定数「109」。ところが「身を切る改革」を叫ぶ維新の台頭で2023年には「79」まで減った。すると何が起こったか。各選挙区の定数が減ると、勝つのは第一党の維新ばかり。2011年に110議席中57議席（占有率52.3%）だった維新は、2023年には議席数こそ2つ減ったが、79議席中55議席（占有率69.6%）、なんと議会のほぼ7割を占める「1強体制」を築いたのだ。

毎日新聞の試算では削減後、自民・維新は若干議席を減らす「安定過半数が確保できる」と出た。「身を切らない改革」のトリック、ゆめゆめだまされてはいけない。

幽霊が消えない理由

板野 円香

(薬剤師・岡山県在住)

最近「Tempalay(テンパレイ)」というバンドの曲ばかり聴いている。というか、しか「聞いてないので、車に乗るたびにサブスクのプレイリストが同期され、気づけば車内は彼ら専用のジュークボックスと化してしまっている。なかでも特に好きなのが『Ghost World』という曲。理由はうまく説明できない。ただ、強く惹かれるのだ。

『Ghost World』は、Tempalay の4作目となるフルアルバム『ゴーストアルバム』に収録されている曲で、そのジャケッとはマジカルアイの技法で、見えないモノと見えるモノが重なりあったデザインとなっている。作品全体通して両義的な感触が通底しているのだが、なかでも『Ghost World』は、聴くたびに寂しきや安堵、どうしようもない郷愁を呼び起こす。何故だろうか。

音楽的に見れば説明できそうな要素もある。例えばストリングス。弦楽器の持つ揺らぎは、感情に陰影を与える装置

としてもよく知られていて『Ghost World』でも効果的に使われている。だがそれだけではない。とりわけ異質、かつ印象に残るのが「ポー」と響く抑揚のない音、サイン波である。サイン波は、単一の周波数だけを持つ人工的な音であり、自然界には存在しないと言われている。それがストリングスと重なって、記憶の奥で鳴っているような印象を抱かせる。でも懐かしきを感じるのに、思い出せる過去が見当たらない。いったい何と共鳴しているのか。

身近に「Tempalay」を語れる人がいないので、その日私はChatGPTと「Tempalay イイよね、神だよね」(庄一)というような話をしていた。ふと、この曲で感じた郷愁や寂しきについて質問してみたのだ。そして一つのキーワードが浮かび上がった。「Ghost Worldは不在が存在している曲なのだ」

サイン波として鳴り響く不定形なもの。ラストのサビ前でそれが緩やかに沈んでいき、盛り上がるメロディラインの上に、エントロピーの少ない「あゝ」という歌詞が載る。意味を内在するはずの言葉が意味を語らず、かえって無数の解釈や感情をひらいていく。

コンテツは異なるが、同様の感覚を抱いた作品がある。アンドレイ・タルコフスキー監督の映画『ノスタルジア』だ。奥行きのあるテーマや質量的均衡のとれた画角、語る要素は

多く存在するが、この作品で最も強く記憶に残ったのが、最期のモノクロのシーン（寺院の中に主人公の故郷が内包されている不思議なシーン）である。色彩を失ったはずの世界が、鳥肌が立つほどに鮮やかで思わず息をのんだ。その感情に対する答えが、タルコフスキーが自身の映画論を語った『映像のポエジア』の中にあつた。

「どのように奇妙に思われようと、われわれをとりまく世界に色彩がついているにも関わらず、モノクロ・フィルムのほうが、その世界のイメージを、心理的な、自然主義的な、かつ詩的真実により近い形で再現するのだ」

「芸術は人生そのものと同じように多次元であり、不定のものであるのだ」

「私はロシアの家を、イタリヤの寺院の壁の中に置いた。（中略）これはいわば主人公の内的状態の模型であり、彼に以前のように暮らすことを許されない、彼の意識の分裂の模型である。あるいはおそらく逆に、これは彼の新しい統一体なのだ。つまりこの新しい統一体は、トスカーナの丘陵地帯とロシアの村を有機的に内包しているのである」

つまり、映画とは意味を明確に説明するものではなく、言葉にならないものを、そのまま残すための器だと述べている。そこでは、不在や無形のものも排除されることなく保たれ、現実と幻想、希望と絶望といった対立要素も、従属性も

なくただ並列に存在する。と同時に、受け手が解釈するための余地、いわば空白も意図的に残されているのだ。意味を確定しすぎないこと。不在が存在すること。複数の要素が同じ質量で扱われていること。そこに確かに同質性があった。

きっとこの態度に惹かれたのかもしれない。変な話、私にとって悲しみやトラウマは「乗り越えるべき対象」であると同時に「愛着を抱く対象」でもある。悲しみは悲しみとしてそこに在り続けることで、世界の密度を保つものだ。私にとって幽霊とは、かつて何であつたかを提示する存在ではなく、沈黙や気配といった無形のものが、感覚として立ち上がる構造のことだ。だから幽霊は消えない。

この「感覚的構造としての幽霊」をテーマに、新しい小説が書けないかと最近考えている。外的世界は何も変わらないが、内面での幽霊の定義が変わることで主人公が救われる物語。悲しみを悲しみとして抱えたまま生きていく物語。前のコラムで述べたかも（てないかも）知れないが、私は自身自身のことを書くのが大変苦手だ。もしかすると、これから書こうとしているものが、初めて自分を語るものになるかもしれない。

生き延びる二〇二六

おぎはら きえ

(蔭山)

過去が追いついてきている。

「思い出」と言われていいような出来事をことごとく忘れ、母から「そういえばあんた昔さあ」などと子どもの頃の話をつられても全く覚えがなく、「そんなに忘れられたらやったかいがなさすぎる」と育て甲斐のなさを嘆かれたこともある。

数年前、高校の同窓会に参加してみた。卒業以来、付き合いが続いている同級生は皆無、再会しても会話がはずみそうな予感が全くしないにも関わらず、変わり映えのしない単調な日々の中にハプニングを起こしてみようというチャレンジ参加だった。会の数日前から「せめて顔と名前だけは」と卒業アルバムを引っ張り出して予習（復習？）に励んだ。幸い顔写真を見ればクラスメイトとしていたという記憶はあったが、具体的なエピソードは思い出せぬまま当日を迎えた。元クラスメイトたちは顔を合わせると私の名前を呼んでくれて、こちらも予習（復習？）した甲斐あって堂々と相手の名前を呼ぶことができたものの、「今

どうしてる？」「どこの大学に行ったんだっけ？」という話の振り方しかできず、周りは当時誰と誰が付き合っていたとか、担任にこんなこと言われたとか、思い出話に花を咲かせていたが、それらは記憶の呼び水とはならず私はただただ聞き手にまわるしかなかった。

昔のことだから忘れていくのかといえはそうでもなく、先日は映画を見ている最中に「あれ？この人の名前なんだっけ？」とすでに作中で何度も呼ばれていたはずの主人公の名前が思い出せず青ざめた。脳内の「覚えなくても生活に全く影響ない」ものの切り捨て方がえぐい。

ちがう、私は忘れん坊自慢をしたいのではない。記憶がないということは積み上げがないということだ。

二〇二四年の秋に定有堂教室「読書室ビオトープ」の参加者数名で文芸サークル「らくだのこぶのビオトープ」を結成した。全くのプライベート、収益が出るわけでも社会貢献するわけでもない。でも、昔から漠然と望んでいた「作品と呼べるようなものを書くこと」が叶えられそうに参加した。アイディアがないこと、時間がないことを言い訳にして延々と放置されてきた願いだったが、社会的促進と評価懸念が働いて見事エッセイ『迷妄蒙昧』とサークルの文芸誌『砂塵』に小説「遡上」を書くことができた（sheep sheep booksとエスキースで販売中）。

両作とも枚数としては少ないものだが、それでも書いている最中は自分の知識や経験の無き、感受性の低きなどを嘆いた。またサークルのミーティングをしたりメンバーの作品を読むなど他人と並ぶことで自分に欠けているもの無いものをますます思い知らされた。

なんで今までもつと積極的に経験したり勉強したりしてこなかったんだーと自分を叱責したい気持ちもないではないが、何か新しいことをやろうとしたときに懸念される周りの衝突や失敗、それらの回避行動が今という結果なのだということはわかっている。さらになぜそんなに避けてきてしまったのか掘り下げて考えてみると、幼年時や学生時代の失敗、挫折、恥、人から言われた心無い一言に行き当たる。そして冒頭の一文に戻る。人生の折り返し地点といていいような年齢になったが、ここに至って俄然清算できていない過去が魑魅魍魎と化して追いかけてきている。切り捨てたつもりが諦めたつもりが、忘れていなかった。私は漫然と時間を消費して何一つ仕事を成し遂げていないではないか。

定有堂教室「ドウルーズを読む会」で松本卓也著『斜め論』（筑摩書房）を読んだ。本書ではハイデガーの『存在と時間』を由来として、ひとは「死を意識することによって、自分が本当にやらなければならないことに目覚める」

とされ、かくして『「自分の死を賭して何か重大なことを成し遂げることを」を称揚する悲劇的かつ英雄的な思考が誕生』したと紹介している。何か一つのことをやり遂げなければならぬプレッシャーの元凶はこいつだったのか！と思ったが、この本ではハイデガー自身の思想とは区別して「ハイデガー主義」と呼んでいる。思想って、それを提唱した本人の意図を超えて他人が都合よく解釈していくことよくある。

そしてこのようなハイデガー主義の心のあり方を「垂直方向」と表し、対する横のつながりを「水平方向」と表して、その一例として社会学者の上野千鶴子を紹介している。上野は『生き延びるための思想』（岩波書店）で『ヒロイズムは女というか、フェミニズムの敵だとずっと思ってきました。フェミニズムって、やっぱりダサくて日常的で（笑）、「今日のように明日も生きる」ための思想なんです。じゃないと子どもを産んでいられない。』と語っている。

そう、私はまだ今の倍生きることを見野に暮らしていかなければいけないのだ。

「きんじょ」日記

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ブックスセンター)

歩いて行ける範囲に二軒の銭湯があるということがとても贅沢なことだと最近になってよく思う。R温泉は脱衣所が広い。浴室も広いし湯船も広い。よくしゃべる大学生の三人組とかがいても全然気にならない。泡風呂がぬるくて大変よい。息子は水風呂が気に入っている。S湯は最近綺麗になった。ロッカーの戸がガラス張りで、大きなソファがある。奥のおおきな薬湯がぬるくて大変よい。息子は水風呂が気に入っている。風呂上がりには「幽遊白書」を読んでいる。コンビニで売ってるタイプのパーパバックのやつ。毎回一話から読み始めるので全然終わらない。それでも一生懸命読んでいる。

どちらのお風呂でも知り合いとたまに会う。みんな近所のひとだ。「おつ」と挨拶するだけのひともいれば、最近の話でだらだらするひともいる。S湯の暖簾をくぐるとKさん

が身体を洗っているのが見える。ちょっと久しぶり。広いお風呂で話していると声があちこちに反響する。女湯の方でも何やら盛り上がりつつある声がある。身体を流す水の音。テレビでは芸人がなにかを食べている。低く小さく歌い出すおじいちゃん。いろんな声や音が響き合ってるなんの話をしているのだからよくわからなくなってくる。それでも別にいいのだ。どうせまたすぐ会う。「じゃまた」と挨拶して先に帰る。

同じ町内にライブハウスがある。正確にはコーヒーハウスと名乗っている。酒蔵を使った店内は独特の音響らしい。何度も行っているんなひとの演奏を聴いたがなにが独特なのかはいまだによくわからない。ほかのライブハウスに行くことがないからだ。「ハッチェルさんいいですよ」と言われ息子を連れていくことになった。いつもより広い店内で子ども分も習いたいと言いだした。やりたいことはやればいい。きつかけはどこにあるかわからない。

昨日のライブではギターを抱えた人見知りの男性が、「新曲です」と言ってるネコとカメとこたつの歌を歌っていた。ネコのうえにカメがよじのぼって、カメのうえにネコが飛びのつてもうどうしようもない、と歌っていた。おでんをつつきながら音を聴く。どこかで見たことのあるひとが舞台上に上が

る。金属的な音が流れ出す。ピンクのライトとミラーボール。演奏が終わってからヒゲのおっちゃんが「あのひと東京ドームとかでやってるんですよ」と教えてくれた。このへんに住んでるらしい。有名なひとだから見たことあるのか、よくすれ違うから見たことあるのか。近所のライブハウスではその境目がぼんやりしている。

近くのマンションに住むKさんが「引越すんですよ来年」と言い出した。もう誰も住んでいないおじいちゃんの家が近くにあるという。全部片付けなければならぬ。本もあるというのでちょっと覗かせてもらうことになった。電気も通っていない家は昼間でも薄暗い。台所には食器や調味料、あと酒。二階にはスーツや着物、布団。お歳暮やお中元が包みを開けられないまま残っている。薄暗いのは明かりがないからだけではなかった。全てのモノがしっかりとホコリを被って黒っぽいのだ。三十年前に生活が止まったままの家。「これ全部片付けるってねえ…」Kさんは途方にくれている。途方にくれるひとを間近に見ることはあまりない。これが途方に暮れるということかと、大量の暮らしの残骸を前にして思った。客間の人形類はOさんに古道具の市場に出してもらったのだろうか。ウイスキーはHさんが何とかしてくれるかもしれない。エアコンやら金属類はYさんに頼んだ

ら何とかするんじゃないか。モノを目の前にするといろんなひとの顔が浮かぶ。ちょっと声をかけてみます、と約束してしまった。まずはお金に変わりそうな古道具とお酒から、次に無料で処分できそうなもの。最後にお金を払って捨てなければいけないもの。一ヶ月以上かけてちよつとずつ手を入れていく。屋根裏から予期せずレコードが出てきたり、室外機が空中で宙ぶらりんになったりしたが家は少しずつ広くなっていった。棚の奥から出てきた古いラブレターの宛名は親戚にはいないひとの名前だった。棚をのけると窓が開いた。南向きの小さな庭には何本か木が植わっている。「あれはおじいやったと思うんですわ、ほんでそのよこがおばあかなど。だいが弱ってるけど」と木を指差しながらKさんがいった。家は来月には取り壊されるという。庭には新しい木を植えるのだろうか。

開風社待賢ブックセンター

〒602-8125

京都市上京区大宮通榎木町上る菱屋町8-18

080-3166-1385

Info@kaifusha-books.com

<http://www.kaifusha-books.com>

Talkin' Quiet, Say Something

高木 善祥

(SHEEPSHEEP BOOKS)

所用で南部町のキナルなんぶに行ってきた。図書館を核に、歴史資料館・パンやジェラートが食べられるカフェスペースにコワーキングスペースもある複合施設だ。

元同僚のWさんが働いているので、地域の人たちがどんな風にご利用しているのかを色々と教えてもらった。

図書館内の緑のじゅうたんが敷かれているところは「おしゃべりOK」というルール。平日の昼間ということもあり利用者は少なかったが、友人同士と思われる年配の女性のがんびりおしゃべりをしていた。

施設をひととおり案内してもらい、帰ろうとしたタイミングで、隣接する小学校から子供たちがワーツと入ってくる。普通の図書館なら「シーツ」と注意されると思われるが、周りの人は気にする様子もない。ここではこの賑やかさがスタンダードなのだろう。

寛容であることが当たり前の場所。「施設の職員さん」ではなく、子どもたちにも「〇〇さん」と名前と呼ばれるWさ

んが楽しそうに働く姿がとても印象的だった。

*

十一月九日、山陰秋の本まつりに出店。三回目となる今年は島根県の邑南町での開催だったので、朝五時過ぎに出発し、四時間ほどかけて到着。（ちなみに今回は運転好きの妻に車を出してもらいました）

公民館のような建物で、山陰の本屋が十店舗ほど。句読点や冬營舎、書架、青と緑、老舗のだんだん書房、出雲に新しくオープンした書堂しろへびなど。

山深い集落に本屋が三軒あり、町としても「本」を打ち出しているようで、「お客さんが来るのかな？」という不安を吹き飛ばすくらいの賑わいだった。

本好き仲間だという七十代の男性お二人が来られ、渋めの古書（コミック）とクセのある新刊を買われる。買った本をお互い見せ合っていて、（年上の方に使う表現ではないけれど）ほほえましい光景だった。

また、出雲在住の元同僚と、松江在住の元部下も来てくれた。ゆるくつながる感覚も大事にしていきたい。

別の会場では、少し前に最新号が発売された『みんなでつくる中国山地』のトークイベントも開催され、残念ながら参加は出来なかったがこちらも盛況だったそうだ。

「場所としての本屋」はソーシャルビジネスとして認識さ

れつつあると思うが、ソーシャル社会性と、ビジネスII商売とのバランスを他の本屋さんたちはどう捉え、どう実践しているのか、話を聞いてみたい。

*

来年から新しいことを始めようと、色々ネタを仕込んでいる。

ひとつは鳥取で活動する方を招くトークイベントで、第一回は昨年鳥取に移住してこられた平見さん。

映画関連の仕事をメインに、DJをやったりZINEフェスの運営をしたりとあちこちで見かけていたので、移住したきっかけや今とこれからのことを話していただいた。

いわゆる映画マニアではなく、「この映像はどうやって成り立っているのか知りたい／身につけたい」が出発点で映画を撮るようになったそう。これは他の活動でも一貫して、技術論や身体論の観点からとても興味深いお話を聞くことができた。

一月のゲストはフィルムアート社の編集者・今野さん。文芸書や雑誌など一般的にイメージされる編集者と、アート系書籍の編集者は仕事のやり方も全く違うと思うので、個人的にも楽しみにしている。

今後は二カ月に一回程度のペースで行う予定。

他にもまだ書けないが、実利を得ること、利益よりは宣

伝を主眼にした活動、趣味全開のお遊びと、本屋を長く続けるための仕組みを地道に続ける一年にしようと思う。

【参考文献】

『アーノルド・ローベルものがたり』エミ・キャスナー 文化出版局

がまぐんとかえるくんシリーズの作者の伝記絵本。

当店にも、「友達に本を貸したけど返してくれないんだよ」と楽しそうに話す九十歳近いお客様がおられます。

『ここは本をかりるだけじゃない図書館』藤坂康司
名古屋で2つの図書館館長を務めた藤坂さんが、図書館での五年間の取組みをまとめたZINE。

【イベントのご案内】

Talkin' Quiet, Say Something Vol.2

日時：一月二十四日(土)十九時〜

参加費：一般 千円 / 大学生以下 五百円

定有堂ビル2階 古書・新刊の本屋

SHEEPSHEEP BOOKS 店主 高木善祥

本を作る側から (34)

村瀬 謙介

(小取舎)

机の上には、前々から作りたいと思っていた小取舎のしおりが置いてある。たった一枚の紙切れだが、これまで積み重ねてきた時間や、これから先へと続く道のりを象徴しているようで、手に取るたびに二〇二五年を静かに振り返る気持ちになる。

振り返ってまず思い浮かぶのは、春に免許を取得してバイクを買ったことだ。昔から村瀬家にはお正月に家族全員が一年の抱負を言つて盃を回すという風習がある。二〇二五年の元日に「バイクに乗る」という目標を掲げた。車より安い維持費が実現し、さらには移動の手段が変わると、世界の見え方も変わる。風や匂いを直接感じながら走る時間は、出版という仕事で凝り固まりがちな思考をほぐしてくれた。何度となく若桜町のカフェまでバイクでトコトコ走り、仕事兼リフレッシュができた。

スマートフォンも最新のものに替えた。長年使い続けたiPhone7(化石)からの更新は、かなり遅れた決断だった。前のスマホは、暗所で映らない、OSが古すぎてアプリの更新ができない、バッテリーがすぐに減るなどの不具合が出始めていたので、ストレスが減り仕事の効率化が上がってきた。

出版の仕事の面では、この年は四冊の本を世に送り出した。内田克彦氏が音信不通に寄稿していたものをまとめ再構築した『鳥取あれこれ』、一般流通はしていないが年に四冊ほど五年間制作している私的小冊子をまとめ、初のハードカバーで製本した『ありがとう朋子へ』、映画を見る側に着目しリサーチした映画史『「見る場所」のメディア考古学』、鳥取出身の革命家福本和夫を主人公とし、前田寛治も登場するシナリオ『人間疎外の時代』。結果だけ見れば三か月に一冊という順調なペースだが、その裏側は決して楽なものではなかった。とりわけ『「見る場所」のメディア考古学』の制作と初挑戦のクラウドファンディング、その刊行イベントの準備に、『人間疎外の時代』の編集が重なった夏から秋にかけては、正直ヒイヒイ言いながらの日々だった。それでも本が形になり、読者のもとへ届く瞬間が、すべてを報いてくれる。

三月には「第6回 図書館で夢を実現しました大賞」優秀賞を受賞した。毎回著者もテーマも違うのでまず勉強する必要があるが鳥取県立図書館を利用しまくっていたのが功を奏したのだが、それでも小さな出版社の歩みが、公共の場で評価されたことは大きな励みになった。また、倉吉市に開設された鳥取県立美術館のミュージアムショップに小取舎の本を置いていただけたことも、地域の文化の中出版が確かに根を下ろし始めている証だと感じている。

今回で閉じてしまい残念なのだが、ブックインとつとりの審査も前回に引き続き関わらせていただいた。毎年開催している鳥取文芸の編集委員も、校正やカラーページ編集などを任せてもらった。新しい出会いにも恵まれた。梅津酒造さんが作る本へのアドバイザーとしての参加、鳥取鹿野の劇団が年二回発行する「鳥の劇場通信」の編集。どれも「本・活字」に携わることが、単独の行為ではなく、人や場との関係性の中で育まれる営みであることを改めて教えてくれた。

さてもう一つ。福本和夫の命日である十一月一六日に発行した小取舎最新刊『人間疎外の時代』は、小取舎として初の二刷が決まり、現在印刷中である。一月中旬には出来上がる予定で、これは出版社代表として素直に誇らしい出来事である。

出版以外の仕事では夏に、あいサポートアートセンター関連の仕事でスタッフとして万博にも参加した。現場で見た熱量（実際に暑かった）と混沌は、地方から障がい者のアート文化を発信する意味を改めて問い直す体験だった。こうして振り返ると、二〇二五年は忙しさの中に確かな手応えがあった一年だったと思う（一才児の育児もあったし）。小取舎はまだ小さな出版社だが、しおり一枚から始まるような、地道で確かな仕事を積み重ねていきたい。二〇二六年もまた、本を通じて人とまちをつなぐ一年でありたいと願っている。

・小取舎の最新刊

『人間疎外の時代』

高取正人 著

本体二〇〇〇円

発行 2025.11



論語について(8)

小原 修治

(県立高校教諭)

湯梨浜町松崎在住)

子游問孝、子曰、今之孝者、是謂能養、至於犬馬、皆能有養、不敬何以別。

(為政篇第二・第七章)

子游 孝を問「と」ふ。子「し」曰「い」はく、今の孝は、是「こ」れ能「よ」く養「やしな」ふを謂「い」ふ。犬馬に至るまで、皆「みな」能「よ」く養「やしな」ふこと有り。敬せずんば何を以「もつ」てか別「わか」たん。

為政篇には、本章も含めて、「孝を問ふ」章が数章続く。うち本章では、子游という弟子が問い、孔子は「孝」には「養」やしな「ふ」だけで無く、「敬する」ことが必要だと答えている。ありきたりの答えのようだが、実はこれは孔子が「孝」に新たな意味づけをしたものであり、この点、加藤常賢の論文「孝の孔子の新解釈」を紐解いてみたい。

それによれば、青銅器に鑄込まれた銘文(金文)には、「孝」の字の「子」の部分に「食」と書いた文字が見られ、老人を養うことを意味する「老」と「食」との会意字だと考えられるが、その用例から、それは「孝」の異体字だと言えるので、「孝」の本来の意味は老人を養うことだったと考えられる。すると、本章で孔子が「今の孝は、是「こ」れ能「よ」く養「やしな」ふを謂「い」ふ」と説くのは、「孝」の本来の意味を「今の孝」の意味として述べたことになり、「敬せずんば何を以「もつ」てか別「わか」たん」と説くのは、「孝」に新たな意味づけをしたことにもなるわけである。その意義について、加藤はこう説明している。

「孔子の時代では、貴族富人たちは、奴隷、即ち今日で言へば下僕女中、その他多くの使用人を抱へて食物を給与してゐた。そののみでなく、「犬」や「馬」までも飼つてゐて、多くの使用人と同じく、それらに至るまでに立派に食物を与へてゐた。／＼するとそれらの家では、親に食物を供与することと、動物に食物を与へることを、同じことに考へてゐたことになります。孔子に於いては、これでは駄目なのだ、親に対しては、物質と次元の違ふ精神的な「うやまふ」敬の心を持たなければならぬ。でなければ、親を動物と同一視したことになる、親に対するのと、動物に対するのと同じじめがなくなつて駄目であると言はれたのであります」。その

上で更に加藤は、孔子が後世聖人と言われるに至った根拠も、「この物の面から心の面へ転換させて、新しい解釈を与えた点にある」と結論づけている。

心の面への転換。先述のように、為政篇には「孝を問ふ」章が数章続くが、その第五章に魯の国の家老だった孟懿子という人物が孔子に「孝」を問うた際、孔子が「違（たが）ふこと無し」と答えたので、それを聞いた樊遲という弟子がその意味を孔子に改めて問うたところ、「生けるには之（これ）に事（つか）ふるに礼を以（もつ）てし、死するには之（これ）を葬るに礼を以（もつ）てし、之（これ）を祭るには礼を以（もつ）てす」と孔子が答えたという話が見えている。ここで孔子は「孝」があくまでも「礼」によるべきものだと言ったわけだが、その「礼」についても、心に目を向けるべきことを説く章が『論語』には散見する。

例えば、八佾篇の最終章には、「子（し）曰（い）はく、上（かみ）に居て寛ならず、礼を為（な）して敬せず、喪に臨みて哀しまずんば、吾れ何を以（もつ）てか之（これ）を觀ん」とあり、「礼」を実行するには本章に見える「敬」の心が必要であることを孔子は説いている。また、『論語』において心の面を説く最重要語は「敬」よりもむしろ「仁」だが、八佾篇第三章には「子（し）曰（い）はく、人にして仁ならずんば、礼を如何（いかん）せん。人にして仁ならずんば、樂を如何（いかん）せ

ん」とあり、「礼」「樂」を実行するには「仁」でなければどうしようもないことを述べている。要するに、孔子は「礼」や「孝」を実行するには「敬」「仁」などの心が必要だと説いているのである。が、なぜ孔子はこれほどまで心に目を向けるのだろうか。

安田登は著書『あわいの時代の『論語』ヒューマン2.0』の中で、季氏篇第十章の「孔子曰（い）はく、君子に九思有り。視には明を思ひ、聴には聡を思ひ、色には温を思ひ、貌には恭を思ひ、言には忠を思ひ、事には敬を思ひ、疑には問を思ひ、忿には難を思ひ、得（う）るを見ては義を思ふ」を引き、「君子」とは心を使うと決めた人のことだとしている。一方、「小人」とは心を使わず、無意識の反応をそのまましてしまう「ふつうの人」のことだとも述べる。

思うに「礼」の力によって「無為自然」に全て事無きを得ていた時代には、人は心を意識的に使わずに済んでいたはずである。が、「礼」の力が弱まるに連れ、心を意識的に使う人が現われた。そこで孔子は、心を自分の得のために使わず、徳のために使うべきことを説き、それによって「礼」の力を高次元で回復させることを考えたのである。

世界終末戦争は世界を内包する

古賀 啓三

(米国ミシガン州在住)

バルガス・リヨサびいきの読者たちの間で、『カテドラルでの対話』と『世界終末戦争』ではどちらがリヨサ文学の最高峰か、という論議があり、『世界』を推す者が趨勢である中、大江健三郎は『カテドラル』派であった、という書評、というか半ば文芸ゴシップ記事のようなもののかつて読み、自分もこの論争に加わりたいたいと『カテドラル』は即アマゾン海外発送で購入したのだが、『世界』は版が絶えており、入手できずにいたのを覚えていてくれた日本の友人が古書店で見つけて送ってくれた。

残念ながら、前述の書評は、大江が『カテドラル』を推した理由を、父と子の確執を主題としているから、と述べるにとどまり、これは、大江自身と長男の関係との重なりを示唆しているものと思われた。ノーベル賞作家は、長男の誕生以降『個人的な体験』を始め、自分と知的障害を持つ「ヒカリさん」との関係を私小説的モチーフとしてはいるが、そこ

に父と子の「確執」がひそまれているか？ ないと思う。あったとしても、自分の作品の主題との類似性のみを根拠に、この作品がリヨサの最高作、と大江健三郎が言うであろうか？ 言わないと思う。と、やっとこの二つの作品を読み比べることができたものの、大江が『カテドラル』に軍配を上げた、という記述の説得力は、はなから薄弱（といういか眉唾）であつたことに気づかされただけであつたが、『世界』を読むべく駆り立ててくれただけでよしとしよう。リヨサはこれまでのところ、『ケルト人の夢』、『楽園への道』、『緑の家』、『カテドラルでの対話』、『世界終末戦争』と読み継いできており、『緑の家』以降、その過剰な、場面や時系列の錯綜の奔放さゆえ、メモをとりながら読む、というこれまでなかった習慣を強いられた。『世界』でもその新しい習慣を踏襲しかけたが、読み始めて直ぐ放棄してしまった。あまりに面白く、とにかく一気呵成に読み了えたい。登場人物のつながりなど細部はもう一度読み直せばいい。その圧倒的な Readability については、僕自身の書くという行為の礎にもなりそうな予感があるので、いずれじっくり読み直し、整理し直すことになると思うが、この駄文は初読の強い印象だけにもたれて書く。「登場人物のつながり」一つとっても、大長編で、数えきれないキャラクターが登場するのに、導入部、道端で拾った片端の乞食、みたいなのが、後半で登場す

る、政府軍の兵士を殺戮し、切り取った性器を口に咥えさせ、木に吊るす、果敢だが残虐な土民ゲリラのリーダーと同一人物であったことに気づき、そうだったんですね、随分ご立派になられて、と驚く、といったように、単発、偶発的な登場人物、イベントなど皆無で、それらは全て、物語の総体と、有機的、相関的、Systemicにつながっている。芸のない言い方だが、隅々まで考え抜かれて書かれた作品である。その完成度の高さが読み手（僕）にもたらす矮小感が読み進めるうえで少し邪魔なくらい。

リョサは、南米文学のことをもつと知ろう、と思つて手に取つたので、ラテンアメリカ文学のウリである、例えばマルケス『百年』の、美しい町娘が洗濯物のシーツと共に、手を叩きながら昇天する、といった幻想文学性の不在にやや気拔けしたが、二作目、三作目と読み進むうちに、そのようなギミックの不在など気にならなくなるほど小説プロパーの醍醐味に心酔、というか、そういう地域限定的な色物として読まれるべき作家ではないのだ、とせっかく襟を正しかけていたのに、この『世界終末戦争』には、マジカルリアリズム的エピソードが散見され、そうなればそうなたらで、やつぱり「待つてました!」と大向こうを掛けなくなる。しかし、『世界』の場合、単一の語り手が、レメディオスが干していたシーツと一緒に昇天したと思ひねえ、と、これはもう「あつ

たこと」として信じてもらうしかないですよ、と有無を言わせず押しつけるのではなく、一見荒唐無稽なエピソードが、それは俗信にからめとられた土着人の視点で見聞きした事象、あるいは、似非科学の信奉者である似非科学者、例えば骨相学者が、髑髏に触れて、自らの学識に則つてくだす、生存時の素性、といったように、作者がでっち上げた「世界」を、もつとも信憑性のある状態で物語の全体性の中に保存する、のである。これも緻密に考え抜くことが要求される作業、技巧である。世界を保存する、と書いて、バイオスフィア、という閉鎖生態系エコシステムの実験がアリゾナの砂漠でなされたことを思い出した。全体小説という言葉があるが、まるで『世界』と略したことが正鵠を射ていたかのよう

に、『世界終末戦争』は世界を内包した小説である。これはきちんと考え抜いて、書き切らないと書けない小説である。自分が作文をするにあたってこのところ自分に課している戒めの一つに、「抽象に逃げない」があると、前にもちよつと書いたような気がするが、芸術なんだから、解釈は読み手の数ほど存在していい、という茫漠さとは対局にある書き方の小説。

おこめの話

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

正月は 心静かに過ごしたいとお考えの方 これからお食事をなさる方は この二ページを飛ばして読まれることを衷心よりお勧め致します 恐懼謹言

「おこめ券」「おこめ券」と、賑やかだ。

最初に、これを見た時、一体誰が付けたんだ、こんな名前、と思ったものだ。他に付けようがなかったのかね。

如何にも座りが悪く、語感もよろしくなく、字面も間抜けである。何より、ある種の言葉を想起させて落ち着かない。米穀交換券とでもしておけば、政府がバラまくにしても、もう少し重みが出ただろうに。

いささか古い話だが、永井豪の漫画に『迷惑探偵ニイボ痔小五郎』(何という題名か!)という作品があった。数ある永井作品の中でも、下ネタ満載の一際下品な作品である。

当時、と叫びかすよしの『トイレット博士』が大ヒットして

おり、これに挑戦したのかも知れぬ。『うんこドリル』の人気ぶりを見るにつけ、今も昔も、小学生男子の好みと言うのは変わらないものであるらしい。

で、その第一話が「廃人二十面チョ」。探偵には二人の女助手がいるのだが、彼女らは廃人の名前を聞かされて、恥ずかしそうに顔を赤らめるのである。なぜと問うに、二人の出身地は、鳥取県と広島県で、つまり、この廃人の名前が、同地では、ナニを意味している、というのだ。

ここで思い出したのが、何年も前の職場での話。

事務室で仕事をしていると、突然、女性職員が「××××ですか、××××ですか」と大きな声で話し始めたので、一体何が始まったのか、と驚倒してしまった。どうやら、電話の相手が喋っていることを復唱しているらしい。

室内には、他にも職員(男性も)がいるのに、誰一人気が付いていない。

慌てて駆け寄り、「悪戯電話だ、切って、切って」と、受話器を置かせたのだった。猥褻な言葉を言って、相手に繰り返させるイタ電である。

当の本人が知らないのは仕方がないにしても、男性職員らが全く気付いていないのが不思議だった。皆、地元出身者で、そこでこの年齢の者ばかりである。

ひょっとして、×××××という言葉は、使用地域がかなり限定されるのだろうか。

筆者は、小学生の頃、中部の町で、この言葉を知った。(友達が、盛んに使っていたのだ)つらつら考えてみるに、東部に帰って来てからは、ついぞ聞いたことがない。

で、辞書を調べてみる。出ていないのですね、『鳥取県方言辞典』(森下喜一編、富士書店、一九九九)。そもそも、この種の言葉が殆どない。あるのは、「ひ××」「へ××」だけだ。他の辞典や研究書も御同様。そのような言葉を採録するのは股間汚券に関わる、と言わんばかり。

ただ一冊、『鳥取県のことば』(明治書院、一九九八)だけが、男女数種類の語彙を拾っていたが、何だか鳥取の言葉とは思えない節も…。

そうそう、五木寛之のエッセーに面白い話があった。(記憶だけで書くので、細部の相違は御容赦願いたい)

北陸のある城下町に、お偉いさんがやって来た。夜は、花街で大豪遊。しかし、威張るばかりの品のなきで、洗練された遊びに慣れた芸者からは響燈を買う。知らぬは本人ばかり、というよくある話だが、オチが振るっている。

さて東京に帰るといふ日、ホームには地元の旦那衆に頼

まれて大勢のきれいな所が打ち揃って見送りに来ている。

ここで、当の大尽、芸者の一人に、当地の別れの言葉を教えろ、と耳打ちし、先の尖った黒い尻尾の生えた女は、人前では絶対口にできない言葉を教え、チロツと舌を出す。

かくして、センセー、列車の窓から身を乗り出して、その×××××を連呼しながらお帰り遊ばした。

『全国マン・チン考』(松本修、集英社インターナショナル、二〇一八)という「マジメ」な本がある。日本全国の、女陰・男根語を丹念に調べ、図らずも柳田国男の「方言周圏論」に一致することを証明した労作である。

これによれば、鳥取県は中部以西が「メ×××」圏で、島根県のほぼ全域と、広島県の大半、山口県の一部までを包含する。そして、県東部は「オ××」「マ××」圏なのであった。

お後がよろしいようで。

(追記) 『とっとり言葉』(森納著、一九八八)には採録あり。
流石に医者だけあって、下半身にも目が行き届いている。

猫のいないクリスマスなんて

三浦 永理

(三十一歳・女性)

猫が死んだ。

die. なんて言葉は使いたくない。pass away. 亡くなった。

私が十七歳の春、高校三年の四月のこと、うちの前のゴミ捨て場にビニール袋に入った状態で三匹の子猫が捨てられていた。そう考えると世の中には酷いことをする人がいるものだ。私の家族は、その日になるまで、誰も動物を飼うなんてことは考えなかった人の集まりで、正直動物は得意な方ではなかったが、結局人に譲ろうと考えている間に、情が移ってしまい、譲ったのは一匹だけで、二匹をうちで飼うことになった。

彼が生まれてから死ぬまでのこの十三年以上の時間、私の人生は大きく変わって、今はイギリスにいる。

親の死に目のことは何度と想像したが、猫のことはそこまで考えていなかったかもしれないというのが本音だ。人間にとつての半年の変化が、彼には二週間ほどで降りかかったのだろう。今は、猫も葬儀をして見送る時代になり、私以外

の父母弟はその葬儀に参加した。写真で送られてきた祭壇の横には、なぜか「Merry Christmas」と書かれたツリーが飾ってあった。

ロンドンではクリスマスの只中だ。冬のヨーロッパ、特にイギリスなど北側にある国々の冬は、長い夜、低い気温、悪い天気に特徴づけられている。日光とはいかに大事なもののか。日照時間の短さのせいか、イギリスではビタミンDのサプリメントが冬の必需品らしい。

そんな冬を乗り越えるのに、クリスマスは彩りを与える。クリスマスマーケットは元々ドイツの文化だが、ロンドンの街中にもいくつがある。教会のサービス(要は礼拝)も、クリスマスに向けた内容になっている。

六年前、鳥取に移住するまで、クリスマスには母校のカトリックのミサに行っていた。そういう意味では、久しぶりに礼拝に参加している。英語でのクリスマスキャロルも、何度か聞くうちに定番の曲がわかってきた。

私の住む寮は、Royal Albert Hall のボックス席を持っていて、この間、クリスマスキャロルのコンサートに行った。どうもこの伝統は一八七二年の開場当時からのもので、何曲かは観客も歌う流れになる。外に出たらあんなに寒いのに、中はクリスマスの文化を楽しむ人で埋め尽くされ、家

族で何度も通っている人もいるようだった。イギリスも、排外主義の盛り上がりに関しては例外ではない。そんな世知辛い世の中なのに、この中ではそんなイギリスの文化の一部に、よそものの私が溶け込んでいる。そんな不思議な感慨があった。

そんなふうにクリスマスの中で祈る中、私は旅立ってしまった猫を考える。一緒にクリスマスを迎えられなかった君。私に生き物のあたたかみを教えてくれた腕にうづくまれるほどの小さな君。猫に出会ったことで、触れ合って愛でることの大きさが分かった。彼は「時きもせず、紡ぎもせず」に、安らかに「生きた」。(聖歌にあるように。)

「クリスマスというのは、ヨーロッパの人にとっては特別らしい」と考えて思い出したのは、ヴィクトール・フランクルの『夜と霧』にあるクリスマス解放の逸話だ。そこには、強制収容所のユダヤ人たちが、クリスマスに解放されることを信じ、何も起きなかった時に次々に亡くなったエピソードが語られていた。この本が紹介されたのは、高校の授業「宗教」の冬休み前だった。

キャロルを久しぶりに歌うと、小学校から高校まで通ったカトリックの学校時代を思い出す。思えば、そこから遠くに来てしまった。好奇心から、知恵の実を食べて、神の元を離

れたかのように。(教会の Organ の礼拝は、この創世記の逸話の朗読から始まる。)私は知りたかった。外の世界で生きたかった。行動したかった。

二〇二五年、私にとって長年の夢だった海外大学院での生活を始め、居心地の良い場を離れた。

「私たちはさまざまなかたで、人生を意味のあるものにできます。活動することによって、また愛することによって、そして最後に苦悩することによってです。苦悩することによってというのは、(略)制約に対してどのような態度を取り、どうふるまうか、そうした制約をうけた苦悩をどう引き受けるか、こうしたすべての点で、価値を実現することがまだできるからです。」「(ヴィクトール・フランクル『それでも人生にイエスと言う』)

振り返れば、この一年間は、活動し、愛し、苦悩し、いつのまにか人生に対してその意味を答えてきた。そして、次に向かうために、私は知ること、自分の身体を持つて理解すること、そしてそれを他者に向けて還元すること、真剣に悩み続けることを引き受けなければならない。

そうしているうちに、ひとつ歳をとる二〇二六年一月。

jelly

あきの素生

(くうねるめがね)

推しに会いに行った。端的に言えば、好きなアーティストのライブに行ったのである。改めて数えてみると、最後に生身の推しに会ってから、四半世紀強が過ぎていた。それって「推し」と呼べるのか甚だ疑問といった有様ではあるが、推し方は人それぞれということひとつ、と誰にともなく言い訳をして、「推し」としたいと思う。

推しを推し始めたのは夏休みだった。それまでも存在を知ってはいたが、特に関心を持たなかった。好きでも嫌いでもない。自分に関わりのある分野の事柄とは微塵も思わずにいた。それなのに、ある日たまたま目にした映像がすべてを変えた。当時はもちろん、「推し」という言葉も、「沼に落ちる」という言葉が慣用句としての作用を持つこともなかったわけだが、振り返ってみると、あのとき自分は、まさに沼に落ちたのだ。その後、短い期間で推しへの執着を深め、夏休みが終わる頃には一端のファン気取りで

あった。

二学期に入り学校生活に戻ってみると、友人が二人、てんでばらばらに同じ沼に落ちていた。そういうの、すぐに「運命」とか思ってしまうお年頃だったので、推しへの気持ちは燃えに燃え上がり、三人で研究したり共有したりしながら、さらなる深みにはまっていた。

その時々になんか夢中になった推しは他にも存在するが、最も推しらしい推しは、この推しだと思っている。現代に生きていて、その活動を現在進行形で応援できる。

にもかかわらず、推しの目指す方向性と、当時、自分が推しに求めていたものが乖離していったこと、自分自身も変わっていったことから、以前のように推しを推さなくなっていた。

私が推そうが推すまいが、推しは推され続け、その活躍は常に私の気持ちを明るくしてくれた。もはや推しは、私の中の殿堂みたいな場所に入ってしまったのだと思う。だから推しは、やはり推しなのだった。

そんな推しと久しぶりに会う。こんな機会はもうないかもしれない。後悔のないように、十全ではないながらも

つりぼつりと情報のアップデートなどしつつ、当日を迎えた。

当日は高揚した心持ちでありながら、本番が始まる前からややナーバスだった。始まってしまえば、あつという間に終わってしまう。その予感確信でもあった。始まらないうと嫌だけど、終わるのも嫌だ。これはジェットコースターに乗る前の気持ちと一緒だと思った。私はこれから二時間強のジェットコースターに乗るのだ。そんな詮無いことを考えて、（効果のほどはさておき）気を紛らわした。また、準備不足であることも気になった。「後悔のないように」とか言いつつ、早くも後悔していた。

そんな状態なので、あまり食欲がわかない。朝食はほとんど、昼食の時間になってもお腹が空かず、夕方からのライブに向けてがっんと食べるといった気分ではなかった。

会場の隣には大型ショッピングセンターがあり、当然のごとく、開場を待つ同好の士であふれていた。水分やちよつとした食料を調達しようと食品売り場に足を踏み入れたが、やはり食指が動かない。日頃あれほど間食しているのに、これは重症だと自覚した。とはいえ、エネルギー不足で本

番を楽しみ切れないなんて事態は避けたいため、なんとかおやつを選び、レジを待つ長い列に並んだ。少しずつレジに近づいていくと、レジ前の商品棚に、「推し活をサポート!」といった謳い文句で、栄養ドリンクやサプリメントが置かれていた。うまいな、と心の中で小さくうなった。そして、並んでいる商品の中に、パウチ袋入りの栄養補給用ゼリーを見つけた。袋から飛び出している飲み口から吸い込んで摂取するタイプのゼリーで、カロリーやビタミン等、目的別に取りたい栄養を選ぶことができる。これだ、と思った。食欲はないけど、水分だけだと心もとない。負担感なく食べられ、ある程度お腹にたまり、そしておいしい。このわがままな気持ちに応えてくれる食べものが、ここにあった。思えば、広告さながら、スポーツの合間、体調が優れないとき、タイトなスケジュールで食事の時間がとれないときなどに支えてもらってきた。一も二もなくカロリー補給用のゼリーを選び取り、レジかごに入れた。ショッピングセンターの戦略にも感謝しながら。

再会した推しは、最高だった。想像どおり、ライブはあつという間に終わったが、後悔はなく、高揚だけが残った。この栄養でもつと遠くまで行ける気がする。

案内



ドラメリア (座敷わらし)



定有堂教室「読む会」 (講師 岩田直樹氏)

定有堂教室「ドウルーズを読む会」

定有堂教室「読書室ビオトープ」

それぞれ会場は とりぎん (県民) 文化会館

葉香太極拳クラブ

会場 麒麟スクエア (市役所二階 水曜夜・土曜昼)

・定有堂教室と太極拳の詳細は
下記の、QRコード参照

(@ドラメリア)



『音信不通』紙版の置き場

・県立図書館2階パンフコーナー

・エスキース (倉吉) ・森の生活者・邯鄲堂・

・SHEEPSHEEP BOOKS (定有堂ビル2階)

・定有堂ビル2階「音信不通」編集部



・編集後記：

今年は定有堂教室葉香クラブに新しく参加される方が増え、賑やかな一年でした。長く続けてくださっている方もニューフェイスの方も、来年またよろしく願います。

出不精の家虫ですが、少し遠出をするのも楽しかったです。

個人的なこととしては、手話をまた勉強したくなりました。皆さま、新しい年もよろしく願います。

ドラメリア (編集長)

「奈良は終わった」と言ったのは、二十年前だろうか。十年前ころから「本屋が読書に追い越される」と言いはじめた。

それから十年、「本屋」は終わり「読書」が残った。本屋の本は消え失せたが、読書の痕跡の本は増え続ける。でも、もう棚を作るための本ではない。棚は空間的なものだ。読書の痕跡は時間的なものだ。読書には初発衝動がある。

あふれる本の中で己を失ってはいけないと思う。それは初発衝動へと立ち返るということだ。「終わった奈良」という言葉がふと思い浮かぶ。何度でも立ち返る。二〇二六年の抱負をそんなふう考える。

奈良敏行 (発行人)